



門八呂
孫 1.387
卷 /

攝陽群談序
攝陽群談成將壽
於梨因支生七條
民以求余叙披而



耳易詳表

間之則分卷一十
七支部三十三山
之時也川之流也
海之廣矣江之永

矣田野原濕林麓
池沼都城之歸存
布井之區別道路
之遠近邑里之小

大津渡橋梁之廣
狹長短彼神祠佛
宇之歷タレ廢宮タレ荒
墓之寥タレ及物ヒ產

之微事實之著目
之所及耳之所觸
足之所至手之所
指サス故老之話漁樵

之談微諸紀錄考
諸歌詩至夫草子
物語之所載必聚
其類必提其要國

字漢文錯綜成章
間設續畫兼供娛
玩可謂用心之勤
矣自風土記之不

傳也我未見如是
之詳且盡者也他
日修名勝一統之
志則攝津一州之

編此書其藁本乎
元祿成寅孟秋
亥朧岐陽侯行軍
使者故昌平學職

菊池新三郎識



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '菊池新三郎' and '識'.



流連此國はもろくもいふゆゑに世の流かこつて代々を
たのみし和歌を詠する人かこの道のとまらぬ今此
の系を撰集しよきしに武士此代かりきあはる
七ひさしころあはれ道統をほく典籍を伝はるし三編
又常流もつ思ふもつらむいふゆゑ乃志はるや
而此後の世まろく代はるゝ鬼をたやる衆生代書事よ
りしつりあはれとあはしむやうに代はるゝあ
ひのすむとあはれかゝる鏡しむつらゝゝ
あはれ事とあはれいふをまづかぬもつらゝゝの辯
あはれし古農工商れいひのるゝうむわゝあはれか
あはれとあはれゝ魚鏡録はるゝ圖と伝はるゝ保とわゝ

わが國の豫備の爲めは民の中あまざるを存す。后稷の
 行ふを志すむわが國の皇般もまもるべく雲は梯と
 ありし徳のほほみふくしめあつたむけり。新とりんく
 徳とよまるとは此筆樹を植へてははらやまあり
 りしと代りての長をそまつかへり。わが國あり
 ありしそまつかへり。あまればはらやまは國を
 産れく。世はまたちんく。國徳もあまらばす
 りしと代りての長をそまつかへり。わが國あり
 ありしそまつかへり。あまればはらやまは國を
 産れく。世はまたちんく。國徳もあまらばす
 りしと代りての長をそまつかへり。わが國あり
 ありしそまつかへり。あまればはらやまは國を
 産れく。世はまたちんく。國徳もあまらばす

とらゆらうはきく。人の徳るふか。和歌勅撰力を
 より出し古事考。来歴のりしむ。いし書。乃。本後成
 か。古武の徳也。はら。福部のとこ。あ。て
 軍記。り。し。ま。俗。傳。あり。る。る。の。徳。り。し。む。
 り。し。ま。俗。傳。あり。る。る。の。徳。り。し。む。
 一。部。の。徳。り。し。む。の。同。し。ら。は。り。し。む。
 撰。陽。辭。後。し。り。し。む。の。り。し。む。の。り。し。む。
 り。し。む。の。り。し。む。の。り。し。む。の。り。し。む。

撰西陳人岡田氏後志自序

振陽群談摭目錄

卷第一 一上

卷第二 一下

振津國緒歷 附 郡 郵 國 俗

卷第三

山 部 歌 名 所 俗 名 所 附 峯 時 窟 窩 洞

瀧 部 歌 名 所 俗 名 所

岡 部 歌 名 所 俗 名 所 附 坂 谷

川 部 歌 名 所 俗 名 所 附 川 原

卷第四

池 部 歌 名 所 俗 名 所 附 洲 瀨

沼 部 歌 名 所 附 岸 堤

澤 部 歌 名 所 俗 名 所 附 岸 堤

海 部 歌 名 所

浦 部 歌 名 所 俗 名 所

卷第五

濱 部 歌 名 所 俗 名 所 附 磯

瀉 部 歌 名 所 俗 名 所 附 磯

嶋 部 歌 名 所 俗 名 所

卷第六

江 部 歌 名 所 俗 名 所

湊 部 歌 名 所 俗 名 所 附 沖 洲

津ノ部歌、各所俗名、所附、泊門、灘

卷第七

橋ノ部歌、各所俗名、所

濟ノ部歌、各所俗名、所

卷第八

野ノ部歌、各所俗名、所附、牧、野

原ノ部歌、各所俗名、所附、森、林、松、原

田ノ部歌、各所俗名、所附、井、水

湯ノ部歌、各所俗名、所

卷第九

市ノ部歌、各所俗名、所附、驛

卷第十

里ノ部歌、各所俗名、所附、道、關

塚ノ部歌、各所俗名、所附、墓、所

陵ノ部附、廟、石、碑

城ノ部附、古、城、古、戰、場

卷第十一

歷世、都、地、古、宮ノ部附、歌、各所俗名、所附、行、宮、離、宮

古、地、舊、屋ノ部

卷第十二

神社ノ部附、鎮、守、叢、祠

卷第十三

寺、院、上、一
寺、院、上、二

卷第十四

寺院下一

卷第十五

寺院下二

寺院ノ部

以上四卷

卷第十六

名物土産ノ部

卷第十七

雜類

難分ノ部ニ名木或ハ石等ノ類拾之

撰陽群談引書

日本書紀

風土紀

舊事紀

古事紀

延喜式

續日本後紀

聖德太子傳

文德實錄

三代實錄

姓氏錄

和名類聚

江家次第

帝王正統錄

萬葉集

古今集

後撰集

拾遺集

後拾遺集

金葉集

詞花集

千載集

新古今集

新勅撰集

續後撰集

續古今集

續拾遺集

新後撰集

玉葉集

攝津國

卅

續千載集 新拾遺集 新後拾遺集

大和物語 伊勢物語 菅家御集

紀六帖 土佐日記 和泉式部抄

能因歌枕 堀川百首 西行撰集抄

寶治百首 徒然艸 夫木集

歌林良枝集 歌枕大名寄 扶桑隱逸傳

元亨釋書 羅山文集 扶桑隱逸傳

艸山集 伽藍開基記 太平記

東鑑 源平盛衰記 太平記

將軍家譜



攝陽群談卷第一上 倭志編集

浪速國 今謂難波也

日本書紀卷第三云神武天皇戊午春二月

丁酉朔丁未皇帥遂東舳舻相接方到難波

之碕會有李潮太急因以名為浪速國亦曰

浪華今謂難波訛云々

萬葉集卷第三大伴宿禰作短歌上畧

待々人々大君... 押照や... 國

攝津國 故老俗傳云天探女神天磐船

未不... 難上... 藤原伊... 嗣朝臣

于北國二撰夕几高津ノ号ヲ取テ撰津國
ト稱ス亦漢書云撰然而天下安云字彙云
撰靜謐也云兩義相共ニ要津ノ連續ニ取
テ大上國トス或寺記云諸佛諸神雍護ノ
土地苦海ノ衆生ヲ撰化スルノ要津夕几
ヲ以テ撰津國ト号ト書リ其證不詳世俗
ノ所謂然リ 日本書紀卷第七五云
孝德天皇二年畧凡幾内索自名壑横河以
来南自紀伊兄山以来西自赤石楸洲以来
北自近江狭々波合坂山以来為幾内國云
同卷第九云天武天皇六年冬十月庚寅

朔癸卯内小錦上河邊臣百枝為民部卿内
大錦下丹比公麻呂為撰津職大夫云々
舊事本紀云國造本紀云據准法命謂撰津
職初為京師柏原帝代改職為國云々
延喜式卷第十五云諸國年料供進幾内國
營田春米六百五十四斛七斗三升二合撰
津國二百九斛七斗九合云々
同卷第二十四云撰津國行程云々
同卷第二十六云撰津國正稅公廩各十八
萬五千束國分寺料一万五千束大月寺料
五千束修理池溝料三万束救急料六万束

云、和名類聚卷第五云、攝津國延暦十三年停

職為

津乃必此海の傍に船を寄らしむるなり。其の津の波も高し。其の津の砂も多し。其の津の石も多し。
新撰九

津守國 今住吉ノ一郡ニ属ス

郡夫木 日本書紀卷第九五云、孝徳天皇一年

凡郡以四十里為大郡、三十里以下四里以

上為中郡、三里為小郡云々

凡田長三十步、廣十二步、為段十段、為町段

租稿二束、二把町租稿二十二束云々

延喜式卷第九二云、攝津國上菅十三 住吉

百濟 東生 西成 嶋下 豐嶋 川邊

武庫 嶋上 八部 能勢 免原 有馬

同卷云、凡郡不得過千戸、若餘五十戸、以上者分隸比郡、地勢不宜分者隨狀立別郡、其不滿百戸者隸入他郡、若不得已而應分者、別錄申官云々、凡諸國部内郡里等名、並用二字必取嘉名云々、同卷第九三云、凡諸國地子帳造三通、一通送主稅寮、一通主計寮、一通官厨具錄田上中下及損益附正稅

帳使申送若不換去年勤出物者拘留稅帳
 返抄神稅帳造二通一通送神祇官一通送
 省云 和名類聚卷第五云攝津國 管十三
 田万二千北五町七百十八步正公各十八
 万五千束本稻四十八万束雜稻十一万束
 住吉郡 須三住道 須無 大羅 於保与机全
 多餘戶 榎津 豆以奈 百濟郡 良大束部
 西部 南部 東生郡 志比牟我古市 智不留
 郡家 酒人 味原 餘戶 西成郡 途
 長源 安良 伏見 美布之槻本 都木乃
 郡家 宅美 讚揚 雄惟 三野 津守

驛家 餘戶 鳴上郡 志美未乃 濃味
 兒屋 眞上 美未加 服部 利波止 高上 鳴下
 郡 志未乃 新屋 雨比 宿久 安威 阿 穗積
 美保郡 豐嶋郡 未手志 秦上 秦下 驛家
 豐嶋 萬天之 餘戶 素津 津久波 大明 於保
 河邊郡 乃加波 雄家 信平 山本 也万 為奈 郡家
 楊津 也奈 餘戶 大神 於保 雄上 武庫
 郡 古加美 兒屋 也古 武庫 古無知 石井 以之 曾根
 津門 都廣田 多比呂 雄田 多手 有馬 郡 阿利
 春木 波留 幡多 發多在 羽束 加波 之大神
 忍壁 於上加倍 兔原郡 良波 加美

攝陽郡誌卷第一上

四

葦原 布敷 津守 天城 寛美 佐才

住吉 ○八田部郡 生田 宇治

神戶 八部信也長田奈加能勢郡世乃

能勢 雄村良平無枳根木子以上管十三七

十八箇村和名類聚二所載也

百濟郡 卅郡名今闕名セリ 續日本後紀

卷第一云以撰津國百濟郡荒廢田二十七

町野賜源朝臣勝云 故老俗傳云百濟

郡東部西部南部ノ郡里相共ニ仁德帝ノ

御宇海潮逆上テ西海ニ流入トイハ凡源

順和名ニ所載アリ後世百濟ノ郡里ヲ闕

テ素生ノ大郡ニ結フ因テ中古ノ人素生
闕郡ト書リ近歲闕ノ字モ除テ百濟ノ郡
里斷絶セリ

關古名村 杙全餘戸古市郡家酒人餘戸長
源安良伏見槻本宅美讚揚雄惟三野驛家
餘戸濃味高上新屋驛家餘戸大明揚津餘
戸大神雄上加美石井曾稱雄田春木忍壁
加美天城覺美佐才雄村布敷葦原
以上三十九箇所卅并同名別郡ニ有シ
以テ重出ス所也
割國分他邦村 住道 和名類聚ニ所載今

河内國丹北郡ニアリ丹北モ始丹比郡也
 後世分毫ノ誤シテ丹北郡ト成リ亦二
 分テ丹南郡生リ
 轉所稱古名村 大羅村今在住吉郡庭井 擾津
 今住吉郡住吉村 味原村今在住吉郡原ト稱スルノ
 ノ名所ニ住吉郡上郡ニ有テ津守關今西成郡ニ
 不知郡家今鳴屋郡鳴上郡ニ有テ津守關今西成郡ニ
 住吉郡今鳴屋郡鳴上郡ニ有テ津守關今西成郡ニ
 所住吉郡今鳴屋郡鳴上郡ニ有テ津守關今西成郡ニ
 關テ今鳴屋郡鳴上郡ニ有テ津守關今西成郡ニ
 郡鳴屋郡鳴上郡ニ有テ津守關今西成郡ニ
 豊嶋郡鳴屋郡鳴上郡ニ有テ津守關今西成郡ニ
 今有馬郡鳴屋郡鳴上郡ニ有テ津守關今西成郡ニ
 三輪村也八部今有馬郡鳴屋郡鳴上郡ニ有テ津守關今西成郡ニ
 村有テ根能勢社今有馬郡鳴屋郡鳴上郡ニ有テ津守關今西成郡ニ

以上十四箇村古名有テ地ノ易ル所也
 古名轉文字村 秦上 今有馬郡鳴屋郡鳴上郡ニ有テ津守關今西成郡ニ
 或上津門 今有馬郡鳴屋郡鳴上郡ニ有テ津守關今西成郡ニ
 同ニ津門 今有馬郡鳴屋郡鳴上郡ニ有テ津守關今西成郡ニ
 作ルニ津門 今有馬郡鳴屋郡鳴上郡ニ有テ津守關今西成郡ニ
 =テ小部為奈 今有馬郡鳴屋郡鳴上郡ニ有テ津守關今西成郡ニ
 以上七箇村ハ文字易テ古名ヲ持ツ所也
 歴世不易村 眞上服部宿久安威山本武庫
 廣田住吉生田長田 以上十箇村ハ和名
 類聚ニ所載今ニ其郡コトアリ
 所載軍記關名之村 眞井嶋屋安富安垣
 東鑑云文治三年二月朔日癸酉二品以没

官領内二箇所可被避于建礼門院之由有
 其沙汰是根津國真井嶋屋兩庄也元者八
 條前内府知行也云々文治六年四月十九
 日壬寅内宮役夫大工作料未濟成敗所々
 事根津國平野安垣下知景時處返事如此
 相副之同國安富相尋早河太昂遠平處件
 所一切不知行之由申之然者可被尋之也
 云々今十二郡中二四箇ノ名ヲ闕リ平
 野ノ号ハ今住吉郡川邊郡兩所ニアリ
 古名轉寔村 来狹狹村出于月能勢郡宿
 野村ニ神社アリ所傳州々宮卜稱ニ宿野

土器ノ名物トス 延喜式神名帳云根津
 國能勢郡久佐々神社一座云々
 日本書紀云根津國来狹狹村私民部名曰
 贄土師部云々是ヲ以テ来狹狹村今宿野
 村ニ轉スルノ證トス委ノハ神社門ニ論
 之因テテ是略之 ○鹽生野村 此所土
 俗惡唱近歳上ノ一字ヲ除テ生野村ニ改
 有馬郡ニアリ其證所傳ニ因リ
 ○荒苻 川邊郡荒苻ニ轉ス苻苻ニ字相共
 二州字ノ似タルヲ以テ誤ル歟荒苻池ノ
 名所其部ニ比シテ詳ニ論之

石風呂在村 嶋上郡太田村ニ轉ス其證
所傳ニ因ル耳也 外古名交易ノ村里雖可
多未考或ハ所傳未詳因テ畧之

○今謂管十二 東ハ城攝ノ境地山崎ノ

西西ハ播攝ノ境川ヲ限リ索西凡十

八里南ハ攝泉ノ境界大小路ヲ限リ

北ハ播丹攝ノ境地三國峠ヲ限テ南

北凡十五里公料私領寺社領相共ニ

凡三十八萬千八百石餘

住吉郡 攝津國風土紀云真住吉國云々
日本書紀延喜式和名類聚ニ所載神社門

ニ詳也因テ略之 伊豫物治少云住吉此郡

行々此里位々の儀々々々

東生郡 一名大郡攝津一州ノ國府也

日本書紀卷第十九云欽明天皇廿二年是

歲復遣奴臣大舍獻前調賦於是於難波大

郡次序諸蕃掌客額田部連葛城直等使列

百濟之下而引導大舍云々

續日本後紀卷第十四云仁明天皇兼和十

一年二月戊子攝津國言依去天長二年正

月廿一日兼和二年十一月廿五日兩度勅

旨定河邊郡為奈野可遷建國府而今國弊

民疲不堪發役望請停遷彼曠野便以鴻臚館為國府且加修理者勅聽之云々鴻臚館八大郡ニリ其證猶舊屋ノ部ニ論之

西成郡 一名小郡 出日本書紀 續日本後紀云 養和元年八月丙戌賜攝津國西成郡閑地一百町於諱云々

三代實錄云 攝津國西成郡人隍陽乞阿刀宿稱負範貫附左京職云々

嶋上郡 世俗志末加美ト稱ス 續日本後紀卷第四云 養和二年四月癸卯

攝津國嶋上郡荒廢田三町賜左大臣正二

位藤原諸嗣云々

嶋下郡 世俗志末志多ト稱ス

三代實錄卷第六云 貞觀四年三月十四日

攝津國嶋下郡住吉郡古荒田三十五町九

段奉充中宮職云々

和泉抄 豐嶋郡 續日本後紀云 攝津國豐嶋郡人散

位從七位下出雲連云々 姓氏錄云 攝津

國皇別豐嶋連云々

能勢郡 出于延喜式知名類聚

有間郡 今有馬二作儿 日本書紀卷第北

三云舒明天皇三年秋九月丁巳朔壬亥幸
 于攝津國有間温湯云々
 河邊郡世俗加和奈部ト稱刀
 古事紀云仁德天皇為太后之弟田井中比
 賣御名代定河部云々日本書紀云欽明
 天皇北三年略河邊臣云々
 武庫郡出于延喜式和名類聚或務古
 元亨釋書卷第十八云昔神功皇后征新羅
 而還埋如意寶珠及甲冑弓箭寶釵衣服等
 故曰武庫云々
 兔原郡出于延喜式和名類聚世俗以波羅

郡ト稱ス 大和物部云ひくはの國
 任女ありさうりそねびよるふ男ゆさうありさう
 印ハそのまゝしむのとゆはひりまのさきさき
 ハ部郡 今矢田部ノ三字ニ作ル
 古事紀云為八田若席女之御名代定八田
 部云々續日本後紀云兼和二年攝津國
 人散位夫田部造聰耳弟從八位貞成等賜
 姓興津宿稱云々三代實錄卷第五十一云
 仁和三三年二月矢田部造利人為長門人云
 凡郡里ノ名ハ二字ヲ用ルノ事延喜式ニ
 所記始ニ引書レテ示是畧之

長門縣志卷上

大坂 攝津一州ノ府諸國海陸道路ノ要津
 廣大ノ地也士農工商ノ民家梵ヲ並ブ市
 店ニ立ッテ萬物求ルニ不足ト云コトナシ
 故老俗傳云難波ノ都津泊等ハ古歌ニ寄
 テ所求アリ大坂ノ市中ニ郡ヲ分コト古
 語俗傳ニモ證不詳大概論之今ノ東横堀
 ヨリ東ヲ東生トシ西ヲ西成トス或ハ又
 鹽町口瓦燒場三軒屋下難波等ヲ免原郡
 ニ屬スルノ説アリト云凡其證所取ナシ
 又谷町筋ヲ限リ南ハ生玉天王寺ニ至ヲ
 東生トシ西ヲ西成郡ニ屬ス大畧准之歟

古書本文和歌大郡小郡等ノ古名ニ因テ
 考見ルニ雖不中不遠以是大坂ノ津ハ郡
 外ニ比シテ村里ノ始ニ記セリ亦大坂ト
 号始ノ故縁不詳 日本書紀仁徳天皇
 廿二年紀云天皇又歌曰阿佐豆磨能避介
 能鳥瑤介鳥介多那耆耳淋致喻區茂能茂
 多愚譬豆序豫枳云ト部兼永釋云阿佐
 豆磨 朝妻也在地各避介能鳥瑤介小坂云々
 故老曰小坂今東生郡天王寺村相坂ノ名
 トスルモノ歟後世民家四方ニ溥リ村民
 繁榮シテ竈ノ烟賑アヘリ因テ以テ時ノ

人小坂ヲ轉シ大坂トスルヤ明應年中大
坂ノ号アリ関白秀吉公築城墪之後專ラ
要津ト成テ如モ今ノ廣大ナル事 仁徳
治世ノ帝都ニ超タリ

○住吉郡

住吉村 日本書紀卷第十二云履中天皇六
年略驚住王為人強力輕捷由是獨馳越八
尋屋而遊行既經多月不得面言故歎耳悅
其強力以嘆之不參來亦重使而召猶不參
來恒居於住吉邑云 澤ノ村安立等
遠室小野村 世俗宇里宇野村ト稱ス歌各

所遠室小野也證歎其部ニ然リ

嶋村 一説東生郡ニ属スト云リ

七道濱町村 一説七堂トス所傳不詳

堀町 北所北旅籠町ヨリ南ハ大小路一至

ノ間市店ノ南北ニ攝津和泉ノ兩國ヲ分
岡テ堀ノ号アリ天正年中專ラ繁榮ノ地
舊屋等今ニ所殘アリ皆分部記之

浅香村 或ハ浅香山村ト稱ス

太子傳曆云推古天皇三年乙卯春三月土
佐南海夜有大光亦有聲如雷經三十箇月
矣夏四月着淡路嶋南岸嶋人不知沉木以

交新燒於竈太子遣使令獻其大一圍長八尺其香異薰太子觀而大悅奏曰是為沉水香者也此木名梅檀香木生南天竺國南海岸夏月諸蛇相繞此木冷故也人以矢射冬月蛇蟄即斫而採之其實鷄舌其花下子其脂薰陸沉水久者為沉水香不久者為淺香云々故老俗傳云此香木之是寄之淺香ノ号アリト云リ其證不詳ト云氏所傳ト古書ト附合スルノ所也

大豆塚村 一本東生郡ニ屬スルノ説アリ
奥村 船堂村 北花田
北村

庭井村 ○荻田村 ○杉木村 ○山内村

吾孫子村 日本書紀卷第九神功皇后九年

畧而得神教而拜禮之因以依羅吾彥男垂

見為祭神云々吾彥今我孫子ニ作ル孫ノ

子ヲ彥トスルニ因リ ○寺岡村

前掘村 ○掘村 在出在 ○西喜連村

中喜連村 ○東喜連村 在茶屋 ○平野庄 在皮田

腹見村 新家中野 ○湯屋嶋村 在二家 ○南由邊村

北田邊村 始在東西今南北ニ轉リ三代實錄

卷第六云負觀四年十一月十一日乙亥撰

津國正六位上田邊東神田邊西神並授從

五位下云桑津村和名類聚豊島郡

猪飼野村或ハ猪飼津氏云以路村アリ

日本書紀卷第十一云仁德天皇十四年冬

十一月為擒於猪飼津云鷹合村一本東生郡トス鷹甘邑是也

日本書紀卷第十一仁德天皇四十二年

九月庚子朔依網屯倉阿弭古捕異鳥獻於

天皇曰臣每張網捕鳥未曾得是鳥之類故

奇而獻之天皇召酒君示鳥曰是何鳥矣酒

君對言此鳥類多在百濟得馴而能從人亦

捷飛之掠諸鳥百濟俗号此鳥曰俱知是會

也乃授酒君令養馴未幾時而得馴酒君則

以韋繫著其足以小鈴著其尾居腕上獻于

天皇是日幸百舌鳥野而遊獵時鳩雉多起

乃放鷹令捕忽獲數千雉是月南定鷹其部

故時人号其養鷹之處曰鷹其邑也云堀後百首

夫木 傳持也のつり也後百首

同 行のたわ 鷹の徳を引く百舌鳥の得持也公朝

今ノ俗鷹ヲ其者ヲ鷹匠ト云其是緑也鷹

ヲ以テ鳥ヲ捕シム心ヲ合ト云是ヲ以テ

今ノ俗鷹合村ト書テ多加比ト稱ス

○東生郡 淳上江村 世俗澤ヲ澤ニ誤リ

中野村 世俗寺ト稱ス

善源寺村 世俗宇知宇代ト稱ス

友淵村 内代村 世俗宇知宇代ト稱ス

野江村 關自村 毛馬村 赤川村

藤生村 中村 江野村 南嶋村

木次小路村 今市村 子林村 般若寺

貝服村 上辻村 馬場村 下辻村

放出村 別所村 馬場村 下辻村 般若寺

所トス證歌池ノ部ニアリ ○今福村

蒲生村 ○野田村 ○玉造村 市中大ノ坂ノ

日本書紀卷第十五云 顯宗天皇六年 畧問

曰 何以知乎 答曰 難波王造部 鄴女云々

本村 日本書紀卷第九云 推古天皇六年

夏四月 難波吉士磐金至自新羅而獻鵲二

候 乃俾養於難波 本因以樂枝而産之云々

北 本ノ舊地今民家ト成ノ所傳也

中道村 ○本庄村 ○中濱村 世俗奈加

末村ト稱ス ○鳴野村 ○西今室村

永田村 ○東今室村

大分室村 ○ 深江村 ○ 摸江村 世俗片
 江二依ル太子傳曆摸江或ハ傍江云々
 援並村 ○ 中川村 ○ 岡村 ○ 木村 今
 ノ俗木之村或ハ木野ニ作ル
 小橋村 今人俗乎波勢ト稱ス 日本書紀
 卷第十一云 仁徳天皇十四年冬十一月為
 橋於猪其津即号其處曰小橋也云々
 東高津村 今ノ高津東西ニ分テ西ヲ西成
 郡ニ比セリキ俗凡生津或ハ郡津ヲ本字
 トスルノ説アリ 攝津國風土紀云々
 天磐船泊故號高津云々 猶津ノ部ニ詳也

北平野町村 ○ 南平野町村 以上南北ノ
 二箇邑ハ俗上鹽町ト稱スル所也
 天王寺村 日本書紀卷第廿一云 崇峻天皇
 二年 畧必當奉為護世四王 起立寺塔云々
 因テ四天王寺ノ号アリ 猶寺記ニ詳也
 國分村 此所ニ於テ國分禪寺アルヲ以テ
 國分村ト稱ス亦西成郡國分寺村 國分寺
 アリ 聖武天皇御宇天平年中國分ニ寺ヲ
 營建シ給フノ下寺也ト云リ 寺ハ所傳ノ
 如沙地各ハ東生郡ニ論スルノ國府トス
 ルモノ歟 寺院ハ其部ニ詳也

舍利寺村 此所聖德太子令總佛舍利之所
傳アリ寺院ハ其部ニアリ ○田嶋村
林寺村 此所太平
記ニ出タリ猶野ノ部ニ詳也
○西成郡
今在家村 ○中在家村 ○勝間村 今
俗木妻ニ作ル ○今宮村 家郷中ニアリ
木津村 此所源平盛衰記ニ出タリ一本索
生郡ニ属スルノ一説アリ
下難波村 當領内ノ田圃元祿成寅年新地
町家ト成テ大坂ノ市中ニ成リ

上難波村 大坂町ノ号 ○西高津村 所傳
東高津ニ同シ大坂市中ノ數ニ入リ
九条嶋村 世俗下略シテ終ニ九条村ト成
リ或ハ懼壞ニ作ル負享年中此地ノ懼ヲ
切テ淀川ノ流ヲ直ス号テ今安治川ト稱
ス西ニ殘ル地ヲ西九条ト云宮前宮東等
三箇ノ小邑下リ ○四貫嶋村 所傳不
詳大略嶋ノ部ニアリ ○福嶋村 此所
上中下ト分チ三邑ト成ス壽永集中源平
軍記ニ所載之渡部ノ福嶋也ト所傳セリ
野田村 世俗吉野ノ櫻ニ對シテ野田ノ藤

ト云ノ諺アリ至テ今藤ノ古木ヲ殘シ所
傳セリ猶藤ノ記詳ニシテ雜類ニ比ス
海老江村 ○塚本村 所傳塚ノ部ニ論之
成小路村 郷中ニ十三村 ○浦江村
大仁村 或ハ大アルト稱ス ○川崎村
北所大坂ノ市中ニ續ク天満ノ地ニアリ
町ノ東ニシテ川ノ頭ヲ以テ川崎ト号ス
堂嶋村 北所負享戊辰年新地町家ト成テ
天満ノ市中ニ交リ ○北野村 所傳神
社門天神ノ社記ニ詳ナリ因テ是畧ス
菅根崎村 ○新田村 新田川口 ○三番村 中

鳥ノ中 ○光立寺村 ○濱村 ○越村 皮外多
本庄村 ○國分寺村 所傳東生郡國分村
ニ同シ ○北長柄村 長柄或ハ長柯ニ
作ル 日本書紀卷第七五云孝徳天皇大
化元年冬十二月乙未朔癸卯天皇遷都難
波長柄豊崎云々猶古宮ノ部ニ詳也
南長柄村 右ニ同シ元一名ヲ南北ニ箇邑
ニ分リ夫木集近江丹波云々名寄攝津ニ
比ス因テ證歌是ニ取リ亦紀伊トスルモ
歟 ○新田村 ○三番村 南中嶋ニ

夫木 藤原 正家

平田村

○橋寺村

天号寺在

○大道村

五箇所鳴頭上中堂也

○江口村

上古ノ川口也

月奉書紀卷第七二云

推古天皇十六年夏六月壬寅朔丙辰客等

泊于難波津是日以飭船三十艘迎客等干

江口安置新館云々

同卷第七三云舒明

天皇四年冬十月辛亥朔甲寅唐國使人高

表等到于難波津則遣大伴連馬養迎於江

口船三十二艘及鼓吹旗幟皆具整飭云々

新城村

○淡路庄村

○早江村

齊集川尻北江子... 西宮の... 新江村

藥師堂村

○濱村

郡中ニ同

○増嶋村

高畑村

○國嶋村

本字柴嶋ヲ略シテ今

國嶋ト改作ル日本書紀卷第八云仲哀

天皇八年春正月暑柴嶋為御觀云々

木寺村

北方村

○南方村

川口村

南宮原村

○新田村

宮原ノ中

十倉村

○新在家村

高瀬油井

野中村

○小嶋村

掘上村

今里村

○三津屋村

世所ハ始ニ三社ト

書リ當卿三社ノ氏神アルニ因リ

加^カ嶋^{シマ}村 ○田井中村 ○竹嶋村
 御幣嶋村 ○世俗嶋ノ字ヲ除テ御幣ト稱シ
 或ハ御手村ト云リ 延喜式神名帳嶋下
 郡幣久良神社云々今其神社ハ嶋下郡耳
 原村ニアリ神社門ニ論之 ○野里村
 此所太平記ニ出タリ ○稗嶋村 世俗
 倍志末ト稱ス ○傳法村 南北傳法北傳
 分^フ法^フ ○申村 ○福村 中新家 ○大野村
 申村福村大野等名 ○大和田村 此所
 皆同作ノ地名ナリ ○大和田村 此所
 上古和田ノ泊ノ所傳アリ矢田郡兵庫
 津二輪田ノ名アリ土佐日記ノ證アリ

テ泊ノ部及雜類門水尺衝石等ニ論之
 古傳日記ニ云々和田北泊ありの事
 佃村 此所古ハ田養嶋トスルノ俗傳アリ
 嶋ノ部ニ論之

根陽郡談卷第一上終

